

文化体験を日本語学習に繋げるために

Method of Connecting Japanese Culture Experience to Japanese Study

田村綾子（環太平洋大学 短期大学部）

TAMURA Ayako (International Pacific University Women's College)

要 旨

文化体験や交流体験を日本語学習に効果的に結び付けるには、その体験を学生が客観的に振り返り、自身の文化理解の程度や日本語能力について自己評価することが重要である。本稿では、まず地域と良好な関係を築くために本学で行っている方法を紹介し、次に、セッションで話し合われた学習者の自己評価法についてまとめる。

In order to connect cultural experience and share experiences of Japanese study effectively, it is important that a student reflect on their past experiences. It is necessary to self-evaluate one's understanding of Japanese cultural and one's level of comprehension. First, the method I am describing in this paper is to enable our college to build a good relationship with local residents. Next, I described the self-evaluation method discussed in the session.

【キーワード】 地域活動，文化体験，自己評価，ポートフォリオ

1. はじめに

筆者の所属する短期大学では、既に16年にわたり中国からの留学生を受け入れており、それらの学生が留学期間中、より多くの日本文化に触れ、多くの日本人と会話する機会が持てるよう、様々な地域活動への参加支援を行っている。それは、地域活動を教室での学習の実践の場としてとらえ、その経験を自律的に振り返ることによって、次の学びに繋げるという効果的な学習サイクルを構築したいと考えているからである（図1）。

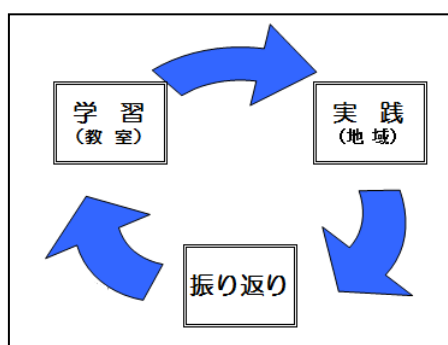


図1 日本語学習のサイクル

しかし、地域活動を行った後で実施している、学生に対するアンケートやインタビューの結果や授業の振り返りの時間での学生の発言をみると、「学生が自律的に振り返り、次の学びに繋げる」という過程に課題があることが分かった。

その原因として、学生が自身の日本語能力、日本文化の理解度を客観的に評価できてい

ないことが考えられたため、学生が自律的に自己評価をすることができる方法、あるいは尺度を教師が示す必要性を感じるに至った。

そこで本稿では、まず、本学で行っている地域活動とその地域活動を行うための地域との関係構築方法を紹介する。次に、本学の留学生コースの活動を基に、留学生が自身の日本文化理解度や日本語能力を評価する方法についてフォーラムで議論された意見をまとめ、考察を行う。

2. 環太平洋大学短期大学部の留学生コースの概要

2-1 受入れ留学生

環太平洋大学短期大学部（旧愛媛女子短期大学）は、愛媛県宇和島市にある。宇和島市のある愛媛県南部は南予と呼ばれ、本学は南予で唯一の高等教育機関である。平成24年度より、名称が変わったが、女子の2年制大学であることには変わりがない。

本学の留学生の受入れは、平成9年に始まり、今年で16年目を迎える。毎年、10名から40名程度の留学生を受け入れており、現在まで400名弱の留学生が在籍した。

留学生の多くは中国の提携大学から1年の予定で来日する留学生であり、原則として「国際商務課程」に在籍する。他学科または他のコースに入学する留学生もいるが、数としては非常に少ない。

表1 留学生の在籍数（過去5年間）

年 度	2007	2008	2009	2010	2011
国際商務課程の留学生	36	28	43	23	16
他学科留学生他	2	1	2	2	0
合 計	38	29	45	25	16

本学の留学生の主な留学目的は、①日本を知る、②日本語能力を高める、③日本留学を将来の仕事に繋げる、である。日本語能力については、日本語能力試験N1の合格を目指す者が多いが、ここ数年は、入学前にすでにN1に合格している学生も増えてきている。

2-2 カリキュラムと地域活動

本学の国際商務課程では、留学生の留学目的を考慮に入れ、専門科目であるビジネス系科目の他に、日本語、日本文化といった科目を多数開講している。また、「地域論」という科目を開講し、地域の方に、宇和島を中心とした文化や歴史を教える教師になっていただき、留学生が文化体験する場も提供していただいている。

日本語関係の授業は、地域行事や交流活動への参加をシラバスに組み込んだものも多い。例えば「日本文化」の授業では、市の納涼茶会、市民文化祭でのお点前、学園祭での茶会の開催を授業活動の一環としている。その他、「プレゼンテーション」では小中高等学校での文化紹介、「コミュニケーション」では地域交流会参加も授業活動に組み込み、教室内活動と実践を結び付けている。また授業中に実践の振り返りも行っている。

3. 留学生コースと地域との関係

3-1 留学生を取り巻く環境

宇和島市には民間のボランティア団体や個人が立ち上げた国際交流協会はあるものの、国際交流を目的とした公的な機関はない。

しかしながら、市民は留学生に対して友好的であり、国際交流や中国文化への関心も高い。毎年、市のホールを借りて留学生のスピーチコンテストを行っているのだが、いつも100名以上の地域の方が足を運んでくださる。また、日本語会話ボランティアや交流会、留学生が講師を務める中国語講座に参加する地域の方は多い。

また、南予にある高等教育機関は本学だけであり、留学生がいるのも本学だけという環境のためか、地域活性化フォーラム等のパネラー、高校生のキャリア教育行事での発表や雑誌制作、ラジオ番組制作など、様々な活動への参加・活躍の機会が与えられている。

3-2 主な地域の協力者と協力団体

宇和島市には、留学生の教育を支援し、活動に協力してくださる団体がある。

①アイタン留学生支援の会

「アイタン留学生支援の会（以下支援の会）」は、2006年に留学生の生活を支援することを目的として作られた団体である。その財源は会員から集められた会費（一口3,000円）であり、現在の会員数は120名ほどである。

会の名称は、本学の旧名称である「愛媛女子短期大学」の略称「愛短（あいたん）」からきており、以前は「愛短留学生支援の会」であった。しかし、大学名の変更によって支援の会の名称も変更せざるを得なくなり、現在の大学名の略称である「IPU短大」から「I」と「短」をとり、カタカナで「アイタン」と表記する現在の名称に落ち着いた。

当初、この会は本学の前理事長が中心となり、その知人である市議会議員、漁協、農協の幹部の方々が会員として名を連ね、主に留学生への奨学金支給などを行っていた。現在は、留学生の地域交流や地域学習を支援する団体へとその目的を変え、実際に留学生の活動に興味を持ち、活動に参加するメンバーが増えつつある。

現在は、行事にかかる一部経費の負担、会誌の送料等の負担、宇和島や愛媛県について学ぶ「地域論」の講師派遣、交流会等への参加、スピーチコンテストの賞の提供と審査員派遣など、様々な支援をいただいている。

②地元婦人会、公民館利用者、本学で行われる公開講座参加者等

この方たちは、もともと本学主催の行事や、本学の公開講座等に参加していた方々で、留学生には直接かかわりを持っていなかった。しかし、留学生主催の交流行事等のお知らせをしていくうちに、次第に行事に参加する方が増え、現在は交流行事参加者の大部分を占めている。

また、これらの人の中から、支援の会に入会する方も増えている。

③留学生のアルバイト先の雇用者、従業員、客

留学生がアルバイト先で出会う多くの方々は、留学生を友人のように、また家族のように受け入れ、様々な支援をしてくださる。日本語のできない学生を受け入れ、仕事を教え、休みには遊びに連れて行ってくださる方も少なくない。多くのアルバイト先の方が、卒業式には保護者席に座り、帰国の時には見送りに来てくださる。留学生の帰国前のアンケートには、アルバイト先で出会った方への感謝の言葉が綴られている。

④ロータリークラブ，ライオンズクラブ，商工会議所，市役所の観光課，宇和島ケーブルテレビ，愛媛新聞，県内の国際交流団体等

地元のお祭りへの参加，インターンシップ，ホームステイ，スピーチコンテスト等での協力をいただいている。奨学金を支給してくださる団体もある。また，宇和島ケーブルテレビの系列会社である「FM がいや」では行事の様子を放送するだけでなく，留学生が日本人リスナーに向けて情報を発信する番組を現在，週1回放送中である。

⑤小，中，高等学校，教育委員会等

人権教育，国際理解教育に関連した交流会や勉強会の講師として留学生の参加・活躍の場を提供していただいている。また学校ごとの交流会のほかに，南予地域の学校の人権委員を集めた勉強会や，宇和島市主催の高校生のキャリア支援プログラムにも参加させていただいている。

3-3 地域との関係構築のための方法

本学の留学生は，様々な方からの支援を受けている。しかし，最初から現在のように，活動の機会をいただいていたわけではない。

地域の方々との関係を構築するために，留学生を積極的に地域行事に参加させるとともに，本学から常に下記のような情報発信を心掛けてきた。

3-3-1 地域全体への情報発信

①広報誌・マスコミ・回覧板・掲示板等の利用

まず，市の広報誌や新聞，宇和島ケーブルテレビ等の協力を得て，広く一般の方々に向けて情報発信を行っている。また，市役所，郵便局，公民館等の掲示板や回覧板も利用させていただいている。

②既存団体への協力依頼

婦人会や老人クラブの代表者や，本学の生涯学習センター等に声を掛け，それらの会に所属しているメンバーに情報を流していただいている。それらの会の所属メンバーは本学と個人的なつながりはないが，グループの代表者がメンバー一人ひとりに声を掛けてくださるため，確実に情報が伝わる。

3-3-2 個人への情報発信

① アイタン通信の発行

年に4回，支援の会の会員，アルバイト先，交流会等の参加者に留学生の近況を報告する「アイタン通信」(図2)を送っている。これは手作りであり，A3用紙2枚程度の簡単なものだが，写真を多く入れ，留学生の活動が分かりやすく伝わるように工夫している。

毎回240通ほど発送しているが，多くの方が楽しみにしてくださっている。留学生が宇和島で様々な体験をする様子を見て，次回の交流の参加申し込みや，自分の提供できる交流や実践の場を提供してくださる方もいる。

②年賀状，スピーチコンテスト文集，卒業論文集の送付

毎年，留学生の写真入り年賀状を300通ほど関係者に送っている。また，支援の会の会員とその年の交流会参加者にはスピーチコンテストの文集を，アルバイト先など特にお世話になった方には卒業論文集も送っている。

以上のような情報発信を続けることは手間のかかる作業であるが，交流会や中国語講座の参加者が常に確保できる状況を実現させるには必要な作業であると思われる。また，交

流会に参加されない方でも、本学に留学生がいることを認識し、日常の生活の中で好意的に接して下さるといふ現状を生み出すことにも大きな力になっている。



図2 アイタン通信の一例

4. 地域活動を日本語学習に生かす上での課題

本学の教育実践において、留学生の地域活動への参加や日本人との交流は比較的順調にしている。しかし、学習者自身がそこでの体験や実践を振り返り、気づきを次の学習に繋げるという部分においては、まだ課題を抱えている。その課題となっている点について以下にまとめた。

4-1 留学生の自己評価

本学の地域活動は、交流会の運営や地域の代表者とのディスカッションなど、高度な日本語能力を必要とするものも多い。参加学生は、周到な準備をし、日本語を使った高度な活動を行う。そして、何度か同様の活動に参加するうちに、教師の指導がなくても自分の役割が果たせるようになる。しかし、このような高度な活動を行えるようになったにも関わらず、自身の日本語能力が向上していることを評価しない留学生は多い。これは、日本語能力が向上しているといっても、試験などのように点数化できないため、どのような能力が身についたか、具体的に実感できないからではないかと思われる。

また、日本人とある程度コミュニケーションが取れる留学生の中には、コミュニケーションが取れた、または発表ができたという事実のみで満足してしまい、より高度な課題に取り組もうとしない者もいる。このような学生は、地域活動や交流会に参加しても気づきが少なく、活動の中から新しい学びを発見することもできない。また活動自体に対する評

価は、単にその内容が面白かったかどうかによって留まってしまう場合が多い。

上記どちらの留学生も「活動は面白かったけれど、自分の日本語能力はあまり伸びなかった」という結論を出してしまう場合が多い。留学生がこのような結論を出してしまうのは、留学生が適切な自己評価ができていないからではないかと考えた。

これまで、地域活動や交流会等の参加に当たっては、事前に留学生に目的と目標を示し、事後には目標が達成できたかどうかの振り返りの時間を取ってきた。しかし、現状を見る限り、現在行っている指導だけでは十分とは言えない。地域活動や交流会等への参加を通して、留学生が自分の日本語能力について客観的に評価することができる尺度、方法を示す必要があると思われる。すなわち、自己評価ができてはじめて、実践での経験を次の学習に繋げることができるのではないだろうか。

4-2 留学生の母国での評価

評価に関するもう一つの問題は、帰国後、留学生たちの日本語能力の向上が正当に評価される場面が少ないという点である。

「日本語能力試験に合格した、資格が取れた」というような客観的な尺度であれば、帰国後、周囲に示すことができる。しかし、地域活動や交流会などによって得た、日本文化への理解や日本人とスムーズにコミュニケーションが取れるといった能力は、帰国後認められる機会が少ない。それは、その能力を発揮する機会が少なく、また、その能力を判断できる人や機関も少ないからである。

留学生たちが、地域活動や交流会に参加してもそれらの活動を次の学習に繋げるために振り返り、自分の能力を分析するということまでしないというのにはこのような状況も関係しているのではないだろうか。

留学生を送り出す大学や留学生の保護者に、留学によって得られた能力を的確に示すことができれば、大学、保護者にばかりでなく留学生自身にも満足感を与える。また、日本留学関心を持つ学生たちの後押しにもなりうるだろう。



図3 ブログ (<http://aitan-kokkou.sblo.jp>)

現在、留学生の出身大学や保護者には、成績表の他に写真つきの母語による活動報告書を年4回送付し、また、ブログで活動の紹介も行っている。

しかし、筆者らが期待する理解はまだ十分に得られていないように感じる。そこで、繰り返しになるが、留学によって日本語能力が向上したことを示し、留学生が帰国したのちに評価されるような明示的な“何か”が必要であると考えられるのである。

以上が、本学の留学生コースにおいて課題となっている点である。この課題について、本フォーラムのセッションにおいて、意見交換を行った。

5. フォーラムのセッションでいただいたご意見

5-1 学生の自己評価ーポートフォリオの活用ー

学生の自己評価については、日本語学習の課程を可視化できる「ポートフォリオ評価法」が有効なのではないかという意見が出された。

ポートフォリオは、一般的に学習者の作品や成果物、自己評価の記録、教師の指導と評価の記録を系統立てて蓄積していくものである。ポートフォリオ評価法では、ポートフォリオの作成を通じて、学習者に対して自己評価を促すとともに、教師も学習者の学習活動と自身の教育活動を評価することができる。

実際にポートフォリオを使い、学習者の自律的学習活動を行っている方から、課外での活動を個人の学習や教室での学習活動に繋げるのに有効であることが報告された。

5-2 帰国後の評価

留学生が帰国した後の周りの評価については以下の意見が出された。

①送り出し側の観点を考慮する必要性

留学生を受け入れる側は、送り出す側の評価の基準や留学目的をもう一度確認するべきではないか。受け入れ機関が、送り出す大学が何をもって留学した学生や留学プログラムを評価しているのか理解していないために、評価されないという場合もある。

②保護者に向けた報告作成上の留意点

留学生の保護者が日本語が分からないために留学の成果が分からないのであれば、分からせる工夫をするべきである。保護者が実際に日本に来て、留学生が日本で日本語を使い生活をしている様子を見るのがあれば、留学の成果が分かるはずである。そうであるならば、留学生が日本人と日本語で話し、活動している様子をそのままDVDで録画し、保護者への報告としたらどうか。

6. 考察と今後の課題

セッションでいただいたご意見を基に、今後、本学で取り組もうと考えていることを以下にまとめた。

6-1 ポートフォリオ評価法

教室での学習を地域活動や交流会など実践に生かし、実践で学んだことを分析し、そして次の学習に繋げていくには、個々の留学生が実践の場で何を学んでいるか、留学生自身に自覚させる必要がある。従って学びの過程が視覚化できるポートフォリオ評価法は有効であると考えられる。

そこで、本学の現状に合わせたポートフォリオのデザインを図4のように考えた。デザ

インを作るに当たって、青木（2006）の『日本語ポートフォリオ改訂版』を参考にした。

まず、来日前の自分を知るための記述（①）を行う。そこには、留学生が「日本語を学ぶ目的、目標、学習スタイル」、「留学の目的、目標、期待」を明記させ、あわせて日本語能力や日本文化理解についての状態を記述する。次に、留学中の記述（②）を行う。これは、短期的な目標設定、実践、目標の達成度の分析、成果物や実践の記録、そこから考えられるその時点での自身の評価からなり、留学期間中、このサークルを定期的に繰り返す。最後に、留学期間終了後の自分自身の分析（③）を行い、留学前の自分の能力と比較をする。①～③のすべての項目について記述、もしくは自己評価を記入していくのであるが、これらの過程をすべて留学生だけで行うことはできない。それぞれの項目ごとに教師がアドバイスをを行う。

これらの記述を行う際には、必要に応じて中国語の通訳を入れる、また記述を中国語で行わせる、などの対応が必要であろう。

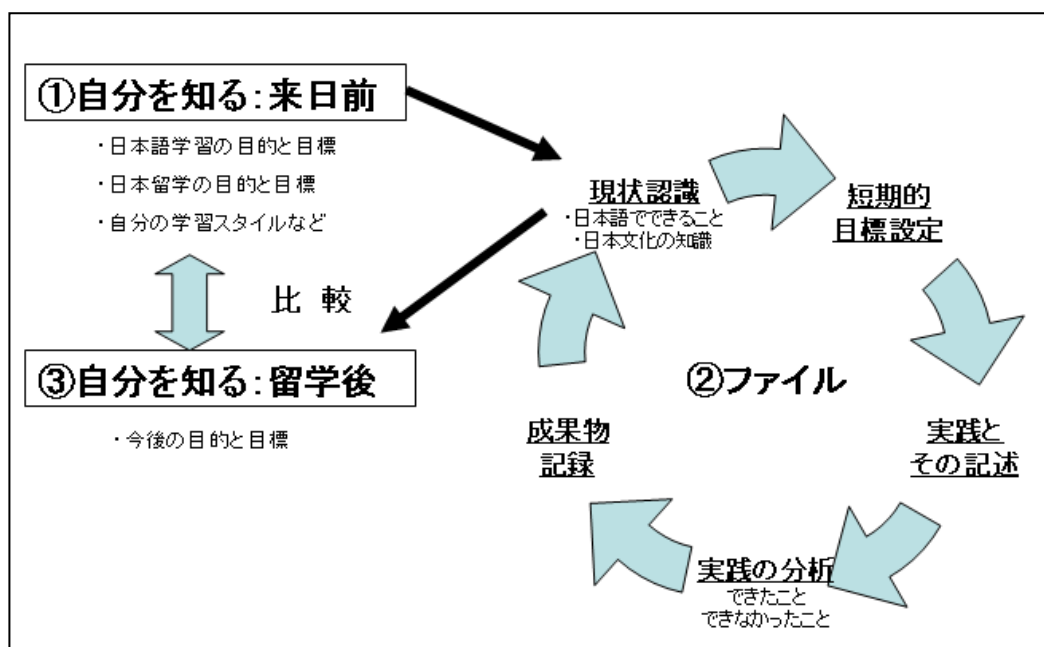


図4 ポートフォリオのデザイン

このようなポートフォリオは、留学生が自主的に自身の日本語学習や地域での実践を振り返り、最終的に留学期間を通じて日本語能力がどのように変化したかを評価するのに適しているように思われる。また、教師は留学生が記述を行う際にアドバイスや指導を行い、それによって学生の学習状況も把握できる。

6-2 留学生の母国での評価

留学生が帰国後、その日本語能力を特別に評価される機会は、本学への留学生送り出し機関である提携大学においてはあまりないようだ。今後、提携大学が学生をどのように評価しているのかについて、引き続き調査していきたい。また、セッションでのご意見にあったように保護者に向けては、日本人と日本語を使って活動を行っている様子をビデオに撮

るなど、留学生の能力を見せる方法を工夫していきたい。

7. まとめ

筆者は、教室での学習を実践する場として地域活動をとらえ、留学生を様々な地域活動に参加させてきた。しかし、そこでの活動経験から何を学んだかを留学生に自覚させ、次の学びに繋げさせるという点で課題を抱えていた。

今回のセッションでは、ポートフォリオ評価法、留学生の母国への報告の仕方などについてご意見をいただき、大変参考になった。これらは、今後の活動に取り入れていきたい。

参考文献

- (1) 青木直子(2010)「学習者オートノミー，自己主導型学習，日本語ポートフォリオ，アドバイジング，セルフ・アクセス」＜日本語・日本語教育を研究する第38回＜日本語教育通信 <http://www.jppe.go.jp/japanese/survey/tsushin/research/201003.html> (2012年8月10日アクセス)
- (2) 青木直子(2006)『日本語ポートフォリオ』改訂版 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/JLPP.html> (2012年8月10日アクセス)
- (3) 石井一成(1998)「地域の日本語支援の場におけるリテラシー行動の類型化の試みーリテラシー理論と言語管理理論からー」『日本語教育』98号，109-120，日本語教育学会
- (4) 葛文綺(2006)『中国人留学生・研修生の異文化適応』溪水社
- (5) 村岡栄治(2006)「接触場面における社会文化管理プロセスー異文化の中で暮らすことはどのようなことかー」『日本語教育の新たな文脈』172-194(株)アルク
- (6) ネウストプニー，J，V(1995)『新しい日本語教育のために』
- (7) 西岡加名恵(2003)『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法ー新たな評価基準の創出に向けてー』(株)図書文化社